

平成18年度 第3回 全学FDの実施概要

1. 実施組織：全学FD委員会
2. 企画運営：高等教育開発推進センター
3. 実施日時：3月28日（水） 13時から16時30分
4. 場 所：箱崎地区文系キャンパス
5. テー マ：GPA制度が目指すことー学生にとって、教員にとってー
6. 趣 旨：

教育審議会において導入が了承されたGPA（Grade Point Average）制度が、平成19年度の入学者から適用されることになった。GPA制度が目指すのは、九州大学の教育が、その機能と結実において、より意義のあるものになるように、不断の点検・評価を実現することにある。

今回の全学FDにおいては、GPA制度を大学教育の質の向上に資するものとするために、学生と教員の双方の観点から、諸課題（GPAに基づく成績評価、「A」評価の意味づけ、履修登録上限設定、GPAが基準に到達しない学生の支援システム等）の検討を、分科会におけるシラバス作成を通して行う。

7. 参加者（120名）
 - ・ 全学教務委員会の委員
 - ・ 全学FD委員会の委員
 - ・ 学部・学科の教務及び学務委員会の委員
 - ・ 専門教育科目（低年次）担当者
 - ・ 全学教育科目担当者
8. 実施スケジュール：
 - 12：30 受付開始
 - 13：00 開会
 - 13：00 総長挨拶
 - 13：10 講演 「GPA制度導入までの経緯と課題」
(休憩・移動)
 - 14：00 分科会 「シラバス作成における到達目標設定や成績評にかかわる課題の検討」
 - 15：30 全大会 分科会報告「GPA制度導入にかかわる課題への取り組み」
 - 16：30 閉会

(資料)

平成 18 年度第 3 回全学 F D では、これまでの全学 F D において参加教員から提起された課題に基づくと、分科会でシラバスの作成に取り組むことを計画しています。

※ 当資料は、全学 F D のホームページに掲載しているアンケート回答の抜粋によるまとめです。

<http://mail.rche.kyushu-u.ac.jp/~rdche01/fd/index-fd.html>

1) 成績評価について

全学 F D (平成 15 年度第 2 回：成績評価) は、アンケートによると、分科会では成績評価に関する問題がほぼ網羅された議論が展開された。

質問 1) 分科会では、教科領域のかかえる成績評価に関する問題点がどの程度取り上げられたとお考えですか。

ほぼ全部	27名 (27.0%)
ある程度	70名 (70.0%)
なんとも言えない	3名 (3.0%)
まだ残っている	0名 (0.0%)
ごく一部	0名 (0.0%)

そして、成績評価にかかわる課題への対応として以下のような意見が寄せられた。

- ・ 成績評価の方法に内在する課題とその個別的運用（極端な成績評価）に関わる問題点とは区別して議論すべきである。そして、成績評価の方法に内在する課題の共通理解がないと、成績評価について申し合わせることによって何が改善されるかについての認識が曖昧のままになる。また、成績評価の個別的運用については、大学教員の学問観、教育観が十分反映する自由度が担保されたうえで検討される必要がある。成績評価が適性であるかどうかは、教員が、シラバスあるいは授業において個々の評価基準をできる限り明示すること（アカウンタビリティ）にかかっており、成績評価基準の妥当性についての判断は学生が行うことになると考える。
- ・ 教員が各自の成績評価基準の明確化を図るには、シラバス閲覧などで他教員の成績評価の実際を見聞することが必要となる。また、成績評価基準の明確化においては、フィードバックされた成績評価を学生がどのように受けとめているかについて知ることが必要である。世間の流れとして言われている「公正」「厳正」な成績評価でなく、学生の将来にとってどのような成績評価が適切であるかについての議論が必要となる。
- ・ 資格試験の合格を目指す授業ならともかく、統一テストによる成績評価は、学生が統一テストを意識した学習に傾き、教員もそれに応える授業を行わなければならないという点で、有効性よりも弊害が懸念される。また、成績評価が進学査定にかかわる場合、同一授業を基礎学力の異なる複数学部の学生が履修している場合など、一律な成績評価基準によって生じる問題とその対応を想定しておく必要がある。

成績評価との関係において、GPA制度の課題として、次のことが指摘されている。

- ①学生にとってのGPA制度の意義についての共通理解を図ること
- ②授業担当教員の学問観や教育観を反映させた成績評価基準を説明する場（シラバス等）を確保すること

2) GPA制度について

全学FD（平成16年度第2回：GPA制度の導入に向けて）のアンケート結果は、以下のようになった。

質問3. 講演「GPA制度の活用」は、GPA制度の仕組みの整理に役立ちましたか。

	全学教育 実施部会	各部局	合 計
役立った	38名	52名	90名
どちらとも言えない	9名	8名	17名
役立たなかった	0名	4名	4名
合 計	47名	64名	111名

質問4. 講演「成績評価とGPA制度」は、GPA制度の問題把握に役立ちましたか。

	全学教育 実施部会	各部局	合 計
役立った	40名	47名	87名
どちらとも言えない	7名	9名	16名
役立たなかった	0名	5名	5名
無回答	0名	3名	3名
合 計	47名	64名	111名

質問6. 分科会は、GPA制度導入の準備として意義のある討論となりましたか。

	全学教育 実施部会	各部局	合 計
意義があった	25名	27名	52名
どちらとも言えない	21名	23名	44名
意義が無かった	0名	2名	2名
無回答	1名	12名	13名
合 計	47名	64名	111名

アンケート調査において、「来年度（平成 17 年度）入学生から適用されるG P A制度の導入に向かってタスク・フォースにおいて検討がなされる予定です。全学教育のみならず専攻教育科目の授業においても重要だとお考えの事柄など、具体的な意見や要望をお聞かせください。」と設けた質問への回答を整理する。

- ・ 成績評価の標準化とG P A制度の導入の目的とは別個のこのように思える。成績評価の標準化をG P A制度と結びつけることにより、G P A制度の本来の目的が曖昧になると思う。
- ・ G P Aという尺度を導入してポイントを算出するだけなら簡単であろうが、問題はどのように運用するかである。個々の学生に対するカウンセリングが出来るアドバイザー制（実質的に学生の修学状況を把握し適確な助言をする仕組み）を同時に実施しないと絵に画いた餅になる。クラス担任、アドバイザー、修学相談員、ピアアドバイザー等の学生支援のシステムの整理を合わせて考える必要がある。成績の良い学生をフォローアップ方策の導入には意義があるが、現在でも学習意欲をなくして単位を取れないでいる学生がおり、G P Aの導入はこれらの学生をさらに追いつめる可能性がある。
- ・ 科目によってはG P Aの段階的成績評価よりも、合否判断のほうがなじむものがある。G P A制度の対象となる授業をどのように決定するかは難問だと考える。少人数による演習（原書講読）等の授業や国家試験のある医・歯・薬の専門科目など、G P A適用の意義を見いだせない科目があると考え。だからといって、選択的にG P Aを適用するのなら、大学としてG P A制度を導入することにならないと思える。
- ・ 授業を増やして学生の履修選択の幅を広げたとしても、高いG P Aポイントが得られる授業に履修希望者が集中してしまうことが危惧される。G P A制度を導入するなら、再履修で良い成績をとろうとチャレンジする学生への配慮を念頭に置いた再履修システムが必要になる。文系は理科を学び、理系は文科を学ぶというように、成績は悪くてもよいから学生の関心の幅を広げるように勧めるのも大学の見識になる。
- ・ 九州大学独自のG P A（名称も変わるのであろうが）のポイントの算出方法を検討することに意味があると考えらるなら、カリキュラム構造の大幅な改訂が必要になる。
- ・ 進学先の振り分けにG P Aを使う場合は専門課程からの、就職に役立てる場合には企業からの、G P Aを使った評価の有益さについての追跡を行い、G P A制度を評価する仕組みが必要になる。
- ・ G P A制度を経年的に構築してくとしても、学生の在学期間が4年であることを踏まえて、学生に混乱が生じないようにしなくてはならない。

以上の問題の指摘や課題の提示から、G P A制度の意義を学生に伝わるかたちで明確化することが重要であり、教員にとっては、G P A制度の導入が、授業の準備や丁寧な成績評価の妨げにならない工夫が求められている。